

様式第3号（第11条関係）

会 議 録

会議の名称	令和4年度 第2回吉川市市民参画審議会
開催日時	令和4年10月27日(木) 午前 10時00分から 午後 0時07分まで
開催場所	吉川市役所304・305会議室
出席委員(者)氏名	坂野 喜隆、松村 勘由、高崎 康男、高田 明充、金澤 美智子、 大手 俊之、木原 十三男、郭 育子、木村 ミツ(敬称略)
欠席委員(者)氏名	小野田 美智子(敬称略)
担当課職員職氏名	市民参加推進課 課長：宗像 浩 同副主幹：松井 勉 同主任：鈴木 沙織 長寿支援課 課長補佐：石塚 晶則 同主任：野口 英里子 障がい福祉課 係長：薄田 千枝子
会議次第 及び会議の 公開又は非公開の 別	<p>【第2回 審議会次第】</p> <p>1 開会 2 会長あいさつ 3 議事 第1号 令和4年度第1回審議会にて選定した協働事業の第三者評価について 第2号 令和4年度 市民参画手続の進捗状況について 4 閉会</p> <p>【会議の公開又は非公開の別】 すべて公開</p>
非公開の理由	
傍聴者の数	6名
会議資料の名称	資料1 令和4年度 市民参画手続実施結果の一覧表(10/14現在) 資料1-1 令和4年度 進捗状況-1. 審議会 資料2 令和4年度 市民参画手続実施予定の一覧表 資料3-1～3 吉川市協働事業評価シート(第三者評価対象分)
会議録の作成方針	<input type="checkbox"/> 録音テープを使用した全文記録 <input checked="" type="checkbox"/> 録音テープを使用した要点記録 <input type="checkbox"/> 要点記録
会議録確認指定者	木原 十三男、木村 ミツ(敬称略)
その他の必要事項	

審議内容（発言者、発言内容、審議経過、決定事項等）

司会

定刻（午前10時）により開会

○第1号 令和4年度第1回審議会にて選定した協働事業の第三者評価について

～老人福祉センター運営事業～

坂野会長

第1号について、事務局から説明願いたい。

事務局

1つ目の事業は、資料3-1「老人福祉センター運営事業」で、担当部署は長寿支援課である。

それでは、担当部署より改めて事業内容をご説明いただきたい。

長寿支援課

本事業は、老人福祉センターの管理運営に関して指定管理者により適切に業務が遂行されるよう管理監督を行うものである。

指定管理者制度については、平成18年度から導入しており、令和元年度までは「市連合長寿会」に委任していた。令和2年度から令和4年度については、「NPO法人たすけあい・よしかわ」に、はじめて管理を委任している。

現法人に委任してからは、コロナ禍ということもあり予定どおりの事業展開が困難なこともあったようであるが、その中でも新たな自主事業を展開することで個人の利用者が増えている状況である。

自主事業について、いくつか例を挙げさせていただく。「はじめてのスマホ教室」では、メッセージの送信方法からグループラインのやり方、自分で撮った写真の送り方などをはじめとしたスマホの操作方法をマンツーマンに近い形で学び、参加者からは孫とのコミュニケーションに役立っているなど、大変ご好評をいただいている。今後、デジタルの活用というのは高齢者にとってもますます必要になっていくと思われる。

また、「ぱれっとサロン」では、老人福祉センターをデイサービスのような通いの場として活用していただけるよう、簡単な体操や、クロスワードなどの脳トレを楽しんでいただき、大変盛り上がりを見せている。

さらに、「ぱれっとシアター」では、昔の映画を上映して皆で鑑賞している。各自、自宅で映画鑑賞することもできるが、大勢で集まって鑑賞するとまた違う楽しさがあるとのことで、こちらも大変ご好評をいただいている。

今後についても、市の担当者と指定管理者との間で月1回設けている会議の場で、

	<p>課題や利用者の声の共有を図りながら、よりよい施設運営ができるように努力していきたいと考えている。</p>
坂野会長	<p>今の説明について、何かご意見等はあるか。</p>
松村委員	<p>事業費の内訳についてお聞きしたい。</p>
長寿支援課	<p>事業費全体で見ると、人件費が大きな割合を占めており、総額の半分弱くらいである。また、これまでは老人福祉センターに寄り道を設けており、各自治会の方がセンターを利用していただけるようにバスで送迎を行っていた。そのため、人件費と共に送迎バスの委託料が事業費の大きな割合を占めていたが、今後は指定管理受託者が工夫を凝らしバス以外の移動手段を考えることにより、バス委託料を削減していくことも考えている。</p>
松村委員	<p>施設そのものの修繕費はどうか。</p>
長寿支援課	<p>非常に古い建物なので、修繕が必要な箇所は毎年あがっており、緊急度に応じて優先順位をつけて修繕を行っている。</p> <p>また、軽微な修繕については指定管理者のほうで対応することもあるが、基本的には建物が市所有であるため、予算を執行して修繕対応している。</p>
松村委員	<p>事業費に対して、利用者数が多くない印象を受けたが、その点についてはどう考えているか。</p>
長寿支援課	<p>老人福祉センターのあり方については、施設の老朽化という観点からも、今ある施設をいつまで使用できるのか、そこにどれだけの予算をかけて修繕していくのかという課題があり、これまでも、さまざまな議論がなされてきた。</p> <p>また、旧市庁舎跡地をどのように整備し活用していくのか、新たな福祉の拠点づくりについて、現在、検討しているところである。センターの費用対効果については、一概に測ることが難しい部分はあるが、高齢者の生きがいや介護予防、認知症予防、レクリエーション機能の充実、こういった視点においてうまく民間のノウハウを活かしながら、利用者満足度が向上し、利用者数が増えるように取り組んでいきたいと考えている。</p>
坂野会長	<p>費用対効果、コストパフォーマンスについては、事務事業評価シートというものが</p>

	あり、市ホームページでも公開されているので、そこで確認することができる。
木原委員	<p>スマホ教室を開催されているとのことだが、高齢者のデジタル支援というのは大切なことである。セキュリティ対策についてもテーマに加えるなどして、今後も継続していただければと思う。</p>
木村委員	<p>中曽根地区では、居場所づくりに取り組んでいる。センターの事業内容を見ると、居場所づくりに通じる点があると感じるので、何かの形で協力していけたらよいと思う。</p>
長寿支援課	<p>当課でも高齢者の方々がつながることで、様々な事業に発展したらよいと感じている。今後、その方法について検討していきたい。</p>
大手委員	<p>指定管理者が変わったこともあり、老人福祉センターの運営については気にかけていた。これまでは、「老人福祉センター」という名称もあり、高齢者だけが集まる場というイメージがあったが、「ぱれっと」という名称になってからは、幅広い利用者が集まる場という印象になってきた。</p> <p>指定管理者の自主事業についても活発なようで、事業に携わる知人が嬉しそうにその様子を聞かせてくれる。センター利用者だけでなく、運営に携わる方にとっての楽しみや生きがいにもつながっていると思う。</p> <p>また、入口付近にある掲示板には、開催される事業の案内がわかりやすく紹介されていた。今まではセンターに入らないと案内を見ることができなかったが、今は外を歩きながらでも目にすることができる場所に案内があるので、利用者にとって、中で何をやっているのかわかりやすくなり、よい取り組みだと感じた。</p>
長寿支援課	<p>入口の掲示板については、センターを利用したことのない方に対しても開催されている事業をPRしたいという提案を指定管理者から受けて、設置したものである。掲示板を見て興味を持ち、センターに来られた方もいらっしゃるようで、新たな利用者の増加について効果があったと感じている。</p>
高田委員	<p>高齢者といっても、今は幅広い層の方がいると思う。センター利用者の平均年齢はどれくらいなのか。</p> <p>現在、文化連盟の活動をしていて感じることは、比較的若い層の高齢者の新たな参加が少ないということである。新たな利用者を増やすために工夫していることがあればお聞きしたい。</p>

長寿支援課

利用者の平均年齢からみると、年々高齢になっていると感じる。昔は60歳で定年を迎えた後に地域活動を始めの方が多かったが、現在は65歳、70歳になっても現役で働く方が増えたことにより、いわゆる地域デビューの時期が遅れているのではないかと感じている。

仕事をしていると、日中、地域の人々と顔を合わせる機会が減ってしまう。また、子ども会などが活発に活動していないと、子どもを通じて地域と交流する機会もなかなか持つことが出来ない。そのような中で、地域デビューのきっかけをどのようにつくるかが課題となっている。

高崎委員

新型コロナウイルスの影響を受け、利用者が少ない状況が続いていると感じる。今後、市内の高齢者は増えていくと思われるので、センター利用者が増えるよう様々な工夫を凝らすことはよいことである。

長寿支援課

現在、令和5年度から7年度の指定管理者の公募を実施しており、先日開催した老人福祉センター指定管理者候補者選定委員会でも、利用者の減少については議題にあがっていた。これまでセンターを中心に利用していた連合長寿会や老人クラブの方々が、コロナ禍ということで利用を控え、今まで利用していた方が抜けていく中で、新たな若い層が入って来ず、全体的な利用者数が減少しているのが現状である。クラブ単位での決算事務や補助金の申請など、書類的な事務作業に苦勞しているようで、そのために解散してしまうところもあるようだ。現在、指定管理者には書類作成の支援などもお願いしているところである。今後、連合長寿会や各クラブの活動が活発になるよう、どう支援していくのが適切なのか、指定管理者と協議を重ねていきたいと考えている。

大手委員

比較的若い高齢者の利用を推進するにあたり、仕事後にも立ち寄れるよう老人福祉センターの夜間利用についても検討したらよいのではないかと。

長寿支援課

開館時間の延長については、利用者の要望をお聞きしつつ検討していきたい。

金澤委員

老人福祉センターの利用者減少について話があったが、高齢者だけでなく、若い世代についても、自治会をはじめとした地域活動離れが言えると思う。おそらく、今の若い世代が何十年後かに高齢者となったとき、老人福祉センターを利用するかと言ったらしないと思う。高齢者の地域デビューを活発化するには、若い世代にも働きかける必要がある。自治会活動や公民館などのイベントに参加する流れを若い世代からつ

	<p>くっていかなければならない。</p>
郭委員	<p>市国際友好協会主催の日本語教室や外国人児童生徒への日本語学習支援に携わっているの、その観点から、老人福祉センターでの、子どもと高齢者をつなぐ事業の実施状況についてお聞きしたい。</p>
長寿支援課	<p>老人福祉センターとしては、子どもを含む多世代交流を目的とした事業の実施事例はないが、指定管理者であるNPO法人たすけあい・よしかわの事業としては実施しているようである。</p> <p>先ほど、スマホ教室を孫とのコミュニケーションに役立てているという利用者の声を紹介したが、孫世代の子どもたちと関わることは高齢者の気持ちが明るくなることにつながる。そういった点からも、老人福祉センター事業とNPO法人たすけあい・よしかわの事業をうまくつなげることができたらよいと思う。</p>
郭委員	<p>日本語教室に来る外国籍の子どもたちは、自分のおじいちゃんやおばあちゃんが日本にいないケースが多い。老人福祉センター事業を通じて、敬老の日などに地域の高齢者と交流できたらよいと思う。日本語を学ぶ子どもたちにとって、様々な日本語に触れることはとても大切だと感じている。</p>
長寿支援課	<p>日本語を学ぶ子どもたちと地域の高齢者が交流することは、お互いの刺激になってとてもよいことであると思う。老人福祉センターの利用者にも、そういった活動に興味を持つ方がいらっしゃるの、うまくPRしてつなげていけたらと思う。</p>
松村委員	<p>多様性が大切にされる今、「老人」と一括りにせず、世代を超えた事業を推進していただきたい。</p> <p>～Warm Blue2021 in Yoshikawa City～</p>
事務局	<p>2つ目の事業は、資料3-2「Warm Blue2021 in Yoshikawa City」で、担当部署は障がい福祉課である。</p> <p>それでは、担当部署より改めて事業内容をご説明いただきたい。</p>
障がい福祉課	<p>本事業は、NPO法人日本ダイバーシティ・スポーツ協会主催で実施されたもので、協働の形態は共催となっている。毎年4月2日の「世界自閉症啓発デー」、4月2日～8日の「発達障がい啓発週間」に関連したイベントを実施することで、障がいや多様性について知る・学ぶきっかけとなることを目的としたものである。</p>

	<p>自閉症のシンボルカラーをブルーとしていることから、市役所庁舎のブルーライトアップや、吉川駅南口のなまずモニュメントブルーライトアップなどに取り組んでいる。また、市役所ロビーでのWarm Blueアート展示では、障がいのある方に作品募集をしたところ、感性豊かな作品が集まり、青を基調とする22点の絵画や立体作品が展示された。さらに、オンライン座談会では、障がいを抱えたパフォーマーによるパフォーマンスが披露された。</p>
坂野会長	<p>今の説明について、何かご意見等はあるか。</p>
松村委員	<p>共催事業ということで、事業費は市負担分0円となっているが、市の施設を提供したり、職員が運営をサポートしたりということがあったと思うがいかがか。</p> <p>また、シート内「2協働プロセス評価（自己評価・相互評価）③ふり返り段階6」において、「来年度以降も継続して事業を希望する場合は・・・」とあるが、本事業は主催団体であるNPO法人 日本ダイバーシティ・スポーツ協会からの働きかけにより実現したものであるのか。</p>
障がい福祉課	<p>事業決算としては市負担0円としているが、協働事業ということで、市として様々なサポートをしている。特に、ライトアップでは市財政課と調整を重ね、実施に至ったところである。</p> <p>本事業を実施するきっかけとなったのは、NPO法人日本ダイバーシティ・スポーツ協会からの企画提案であったが、東京2020パラリンピック開催の機運もあり、市の共催事業として開催された。来年度以降については、作品募集や庁舎管理について調整事項が多岐に渡るため、半年ほど前からの調整が必要であると判断し、市協働事業評価シートではこのような記載となった。</p> <p>今年度も、障がいや多様性の啓発を目的として、障がい者アート展を開催した。</p>
坂野会長	<p>本評価シート内事業決算には、直接経費のみ記載されているが、共催事業ということで、実際には職員のサポートがあり、そういった意味では間接経費があったと考えられる。</p>
木原委員	<p>本事業の主催団体であるNPO法人日本ダイバーシティ・スポーツ協会は、どのような団体なのか。事務所が当市にあるのか。</p>
障がい福祉課	<p>事務所は都内にあるが、本協会の関係者が当市在住というご縁から事業実施に至った。団体としては、スポーツと多様性の調和を目指し、差別や偏見のない社会の実現</p>

	とスポーツ振興を目的として2017年に設立されている。
高田委員	アート作品の発表の場があると、作成する本人達の励みになると思う。もうすぐ市民文化祭があるが、今後そういった場でも障がいのある方の作品を展示する場があるとよい。
金澤委員	Warm Blueアート展示を観に行ったが、こういった展示がもっと広まればよいと思う。また、今後は市民文化祭などで、一般市民と切り分けず展示する場を設けることができればよいのではないかと。障がいの有無に関わらず、一緒に展示することができればよい。
高田委員	市民文化祭の実行委員をしているが、市民文化祭では出展する作品を公募しており、個人でも団体でも参加することは可能である。しかしながら、出展する際には、実行委員会への出席をお願いしている。一般の方と同様のステップを経て出展していただくにあたり、障がいのある方にとって、どのようにしたら出展しやすいかを検討していけたらと思う。
郭委員	私もWarm Blueアート展示を観たが、よい取り組みであると思った。また、先月は障がい者アート展が開催されており、こちらも観覧させていただいた。障がい者アート展は初めての取り組みであったのか。
障がい福祉課	毎年、6月頃にふれあいスポーツ大会、12月の障がい者週間には屋内スポーツ大会の年2回イベントを開催していた。しかしながら、コロナ禍においてイベントを開催できない年が続いたため、スポーツ大会に代わるものとして障がい者アート展を企画した。障がい者アート展が非常に好評だったこともあり、今まで年2回開催していたスポーツ大会を年1回にし、併せてアート展を毎年開催しようということになった。
木村委員	居場所づくりの活動において、習字や絵画など、市民の作品を目にする機会があるが、素晴らしい作品をお持ちになる方が多く驚いている。そういった方々が作品を発表する場をどうにかして設けることができないか考えている所である。 障がいがある方に限らず、サークルなどに属していない一般市民の方が作品を発表する場があると励みになる。
高田委員	来年1月に、市として初めての「市展」開催を予定している。担当課や公民館などでお尋ねいただき、ぜひご参加いただければと思う。

～地域課題を地域で解決するための勉強会～

事務局

3つ目の事業は、資料3-3「地域課題を地域で解決するための勉強会」で、担当部署は市民参加推進課である。

それでは、担当部署より改めて事業内容をご説明いただきたい。

市民参加推進課

本事業は、市自治連合会と市の共催事業である。実施団体である市自治連合会は、市内にある95自治会をもって組織されている。地域に住む人々が安心して暮らせる住みよい地域社会の実現を目的として、市自治連合会と市が協働で勉強会を実施している。

本勉強会は令和元年度からスタートしており、前年度の市自治連合会理事会において「地域や自治会の課題、また、その解決策をもっと話し合いたい」という声が上がると同時に、「地域課題を地域住民が解決するための事業を」という市の思いがタイミングよく重なったことから実現したものである。

令和元年度の6月に開催した全体会では、学識経験者2名から講義をしていただき、参加者がそれぞれ興味を持った分野に分かれて分科会を設置し、各分科会で議論していくこととなった。

メンバーは自治会役員だけでなく、自治会員、市民団体関係者、市内にお住まいの大学生や外国人など多岐に渡っている。

令和3年度の活動については、地域減災班、多文化共生班、自治会課題班の3つの分科会に分かれて研究を行ってきた。

地域減災班では、「要支援者の対応」と「楽しみながら学ぶ減災」の2つの班に分かれて議論を行った。

「要支援者の対応」班では、要支援者の把握の仕方や避難の仕方について議論を重ね、結果を報告書にまとめた。

また、「楽しみながら学ぶ減災」班では、大人だけでなく子どもにも減災について興味関心を持ってほしいという思いから、吉川減災〇×クイズを作成し、冬休みに市内小学生向けに配布したところ、300人を超える子どもたちからクイズの回答があった。

さらに、地域減災班では、中曽根小6自治会という分科会も立ち上がっており、いざというときに備えて日頃から中曽根小学校地区の6自治会で協力して年1回の減災訓練を実施するための協議体となっている。

令和3年度は、中曽根小学校で現場確認を行い、地域主導による「中曽根小6自治会合同 減災プロジェクトX」を開催した。

中曽根小6自治会では、現在、自治会の枠を超え、民生委員やP T A関係者も取り入れながら協議体形成について議論している。

続いて、多文化共生班では、市内で外国人が多く住む地域において、外国人や外国人を取り巻く地域住民が日常生活で抱えている課題を整理し、その解決策について議論している。これまでに「外国人向け支援制度と外国語が話せるお店マップ」を作成・配布した。

令和3年度は、コロナ禍ということで対面でのイベント開催は困難なため、外国人の日常生活における困りごとなど、生の声を集めることを目的としてアンケートを実施した。

さらに、自治会課題班では、アンケートにより日頃の自治会活動で抱えている課題の洗い出しを行った。アンケート結果を基に、主に会員数の減少、役員不足解消・負担軽減、自治会館・備品相互貸借の3つの課題について解決策を研究した。

令和元年度には、会員数向上に向け「自治会加入促進チラシ」を作成した。地元の大学生が中心となって作成し、なまりんのイラストを盛り込み、手に取りやすいストーリー形式とした。本チラシは、市内転入者へ転入手続きの際に配布すると共に、当課のラックへ配架している。

併せて、各自治会が所有する備品や自治会館の貸し借りを可能とした仕組みを整備するために、「自治会館・備品の相互貸借リスト」を作成し、全自治会へ配布した。

令和3年度には、「自治会の枠を超えた、新たな地域コミュニティ」を研究テーマとし、モデル地区として中曽根小学校の6自治会を選定した。これを受けて、今年8月には、中曽根小学校の6自治会に民生委員・学校・P T Aが加わり、中曽根小学校区まちづくり協議会が立ち上がった。

本勉強会は、協働事業という位置付けとなっており、どの分科会においても市民が中心となって研究を進めている。協働の形態としては、市自治連合会と市の「共催」で、相互に事業の企画運営について協議すると共に、主催者としての責任を持って議論を進めている。本勉強会で取り組む課題は多岐に渡るため、地域や行政だけで取り組むことは困難であると考えている。地域には多様化する市民のニーズが把握しやすい点や多様な人材がいらっしゃるといふ強みがあるが、行政に比べて専門性や情報収集力が弱い部分がある。行政には、他自治体とのネットワークによる専門性や情報収集力があるが、決定に時間がかかることがある。地域と行政が協働することで、お互いの強みを高め合うとともに、弱みを補い合いながら、円滑に事業を進めることができる点が協働のメリットだと考えている。

今の説明について、何かご意見等はあるか。

坂野会長

松村委員	<p>勉強会の活動をまとめた冊子が、読みやすく作成されており、すばらしいと感じた。この冊子の配布対象や活用方法についてお聞きしたい。</p>
市民参加推進課	<p>本冊子は、市内全自治会に送付するとともに、市役所内のラックに設置しているほか、ホームページでも公開している。</p> <p>若い世代にも手に取ってもらい、自治会加入率向上につなげたいという思いから、写真を多く掲載し、デザインにもこだわって作成した。</p>
松村委員	<p>本冊子は、自治会活動を身近に感じるきっかけになると思う。</p>
木原委員	<p>本勉強会での取り組みはとても素晴らしいものだと評価している。冊子を見ると、市内の様々な人材を集めて、あらゆる課題について真剣に議論している様子がよくわかる。</p>
高田委員	<p>課題解決に向けた取り組みがよくわかる内容なので、この冊子を多くの方に見ていただけたらよいと思う。冊子の活用についてどのように考えているか。</p>
市民参加推進課	<p>冊子は、予算の関係で作成部数に限りがあるが、多くの方に見ていただきたいという思いから、すべて市ホームページで公開しており、興味を持ってくださった方にはすぐにご覧いただける環境を整えている。</p>
高田委員	<p>現在、自治会で防災組織の一員となっているが、冊子にある地域減災班の活動内容を見て、意識が高まった。</p>
大手委員	<p>冊子を見て、自治会課題班の取り組みに興味を持った。自分が所属する自治会においても、会員数の減少という課題を抱えている。</p>
金澤委員	<p>周りにいる同世代の友人を見ると、仕事や育児に追われて、自治会の会議や行事に出る余裕がないという方が多いように感じている。また、今はインターネットが普及して、目の前の人より遠くの人とつながる機会が増えているのではないかと。</p> <p>そういった中でも自治会や地域の課題に取り組み、議論している人がいることに希望を感じた。まずは、取り組みの内容を知ってもらうだけでも意識が変わるのではないかと。</p>
高崎委員	<p>地域一体となって市の魅力を発信し、活性化していけたらよいと思う。</p>

郭委員	地域課題を地域で解決するための勉強会に地元の学生が入ることで、地域の人々と若い世代が交流する場ができることは素晴らしいことだと感じている。
木村委員	自治会活動が活発になり、お互いの自治会が刺激を受け合うことで、イベントをはじめとした自治会活動の内容がよくなっていくと思う。これは、とてもよい流れである。
○第2号 令和4年度 市民参画手続の進捗状況について	
坂野会長	第2号について、事務局から説明願いたい。
事務局	(資料1、資料1-1及び資料2を用いて説明)
坂野会長	事務局の説明に対し、質問・意見があればお願いしたい。
木原委員	資料を見ると、令和5年度までの計画がいくつかあるようである。計画を策定する際には、オンラインでの動画配信なども活用して、多くの市民参画手続を実施していただければと思う。
坂野会長	<p>以上で、すべての議題を終了する。</p> <p>ご協力いただきありがとうございました。</p> <p style="text-align: right;">(午後0時07分終了)</p>
以上、会議の内容に相違ないことを証するため、ここに署名する。	
令和4年11月16日	
署名委員 木原 十三男 (自署)	署名委員 木村 ミツ (自署)